

2018年度
U13U18ブロックDC
指導者講習会資料

2019/1

JBAユース育成

1. 育成センターの目的を再認識
2. ユース育成担当者の役割
3. 育成センターでの技術戦術指導内容
4. 育成センターでのコーチング
5. タレントスカウティング（選手選考方法論）
6. 2019年度からの選手選考方法論の変更
7. 連絡事項（3月育成センター伝達講習会、マネージャー会議）
8. 各県からの要望事項等

1. 育成センターの目的

■目的

- ・ 個の育成 「選手作り」
- ・ 成長スピードを速める
- ・ 勝利至上の戦術指導ではなく、**習熟度別、段階別を考慮した指導**を行う
- ・ 指導者は**育成世代の指導内容への理解**を深める
- ・ **育成世代コーチング**を実践する
- ・ **タレントスカウティング**の力を向上させる

■タレントスカウティング(選手発掘)

- ・ 今回のU13・U18ブロックDCでの方法論伝達＝都道府県育成センターで活用
 - フィジカルテスト（スプリント・ジャンプカ等バスケットボール特性）
 - バスケットボールスキルテスト（シューティング、パッシング、ドリブル、フットワーク等）
 - バスケットボールIQ（戦術を指導し、表現力・理解力を見る）
 - メンタル特性（リーダーシップ、積極性、闘争心、ディフェンスへの意識等）

1. 発掘

2. 育成

3. 指導者教育

4. 大会整備

5. リーグ戦準備

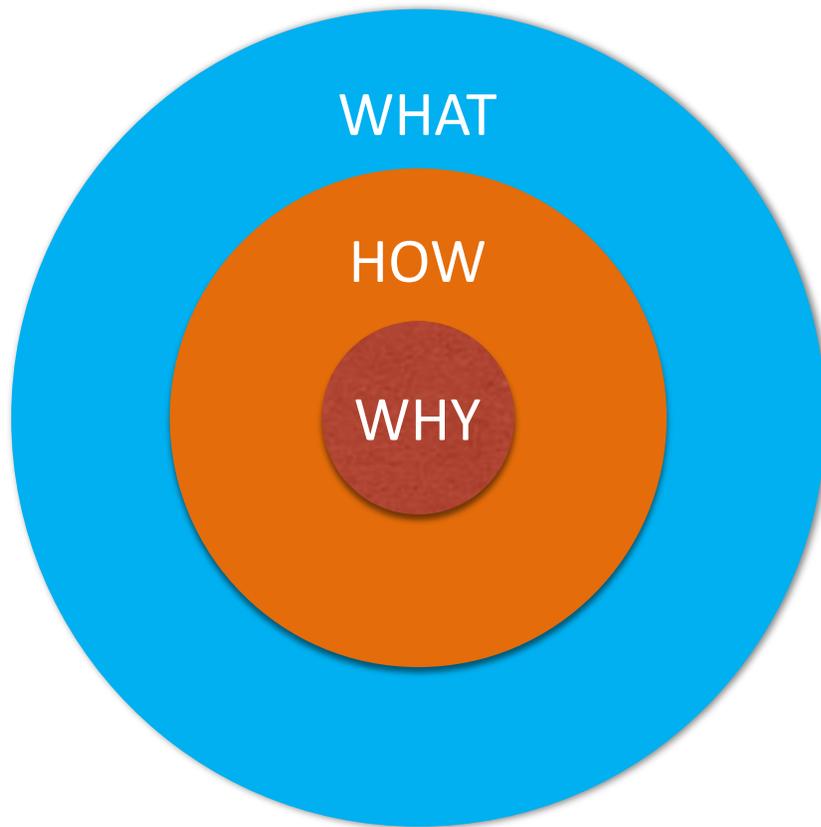
ユース育成組織：
都道府県育成センター

アンダーカテゴリー部会：
都道府県リーグ戦準備
都道府県協会主催大会準備

1. バスケットボールで日本を元気にする

2. 将来の日本のバスケットボールを作っている

3. バスケットボールを行う子供達の幸せを作っている



WHAT = 「何を」

育成センター、リーグ戦を

HOW = 「どのように」

経費処理、構成方法、スケジュールetc.

WHY = 「なぜ」

大義、目的、意義、やりがい・・・

「大義」が根本にあることが重要

「大義」を訴え続ける人が必要

伝えた大義

日本のバスケットボールを良くすれば
日本は良くなる

育成環境を変えれば
日本のバスケットボールは強くなり
さらに普及が進む

皆でバスケットボールを
良くしようではないか

女子は世界でメダル！
男子も世界に通じる時が来る！



「夢 = 大義」を皆で共有すること

「夢 = 大義」がモチベーションになる
「何をやるか」よりも
「なぜやるか」で自分事になる

他人事ではなく
自分事になってもらう事が必要



石工の話

ある建築現場に二人の石工がいた。
「仕事は好きですか？」と尋ねた。

一人の石工は「俺は物心ついた頃からこの壁を作っている。仕事は単調だ。一日中じりじりと照りつける陽射しの下で働いている。石は重いし毎日運ぶのに骨が折れる。俺が生きている間にこのプロジェクトが終わるかどうか分からない。だがこれは仕事だ。賃金をもらっている。」

もう一人の石工にも同じ質問を尋ねた。
もう一人の石工は「大好きだよ。大聖堂を建ててるんだぜ。物心ついた時からずっとこの壁を作ってるよ。そりゃ仕事は単調になりがちだ。一日中じりじりと陽射しが照りつけるし、重い石を一日中運んでいるんだからそりゃ大変さ。俺が生きている間にこのプロジェクトが終わるのかどうかも定かじゃない。でもね、俺は大聖堂を建てているんだよ。」

世界へのチャレンジ

世界を驚かせる！

メダル獲得！



国内で活気あるバスケットボール

普及

バスケットボール愛好者を増やす
バスケットボールを楽しめる！上手になる！
日本代表が強い！応援する！



③ WHAT - これまでの育成事業（エンデバー事業）の検証

育成においては以下の4つの機能が必要

発掘

育成

指導者教育

普及

2002年よりエンデバー事業設置
U12/U13/U18ブロックエンデバー
U14/U15/U18トップエンデバー
2016年よりナショナル育成キャンプ設置
U18は強化代表へ移行、U12/U13/U14/U15
(U12は2018より休止)

発掘の問題点

人数多：力のない選手も選出されている（普及との混在）＝経費大
推薦枠：力のある選手の取りこぼし＋力のない選手の選出
時間少：1泊2日で伝達と発掘の両方を行うのは難しい
方法論：中学世代男子では早熟発掘が多く将来に繋がりにくい

育成の問題点

継続性：継続的な刺激が必要だがブロックエンデバーは年1回の事業
実施度：都道府県育成はJrオールスター、国体強化。県による温度差。
目的異：Jrオールスター・国体準備で行うとチーム強化が強調される傾向

指導者教育（伝達）の問題点

時間少：年1回のブロックエンデバーで伝えられることは限定的（約4時間）
指針要：育成年代に何が必要かの指針が全体像として不足
周知法：指導内容資料が関係者で止まりがちで多くの指導者に届きにくい

普及の問題点

県から選抜されることのステイタスのプラス・マイナス
バスケット界へ選手を取り込むことに貢献できているか？

資源（資金・人）は限りがある
限りある資源を効果のあるところに集中的に投下して成果を上げなければならない

育成における成果とは？

1. 選手が将来大きく成長するための土台を作ること
2. 選手がバスケットボールをすることを楽しいと思えること
3. 将来の代表が世界基準で戦えるようになること
4. 日本のバスケットボール界が活性化していること
5. バスケットボールに関わる方々が幸せに元気でいられること
6. 多くの選手がバスケットボールを行う様になること

成果を上げるための事業を実行することを前提に提案

2018年度よりエンデバー事業を「育成センター(Development Center)事業」と名称変更する
都道府県育成センターが育成活動の中心となる
各年代の将来有望選手候補育成をナショナル育成センターにて実施する
2019年度以降、経費を都道府県DC (D-fund)、ナショナルDCにより多く充当する(ブロックDCをなくす)

発掘方法論

複数回の都道府県育成センター活動により、数回のトライアウトを経てより有望な選手の発掘
都道府県内の有望選手の情報収集をより密に行う
早熟発掘と晩熟発掘を理解し、男女の差異に留意しながら選手を選出するこれまでと異なる方法論
県推薦枠は廃止、力のある基準を満たす選手を発掘しナショナル育成センタートライアウトに推薦
都道府県DC→ナショナルDCトライアウト→ナショナルDC(ブロックDCの廃止)
都道府県格差を埋めるために発掘担当の人材を任命

育成方法論

目標年10回、月1回の複数回実施により、選手に刺激を与え、意識を持たせる
チーム作りではなく、選手作りを目標とする育成コーチングの周知徹底
オールラウンダー育成+特化した能力のより向上を目指すコーチング

指導者教育(伝達)方法論

「どのように指導すべきか」を理解してもらうための育成コーチング資料準備
「何を指導すべきか」育成世代に必要な指導内容を理解してもらうための習熟度別資料準備
都道府県育成センター活動を通じて指導者間で何が必要となるのかを検討する機会を持つ

普及方法論

他県交流戦を各都道府県裁量で実施して頂くことを推奨
地区育成センターの実施によってより多くの候補選手に目指すものを伝えていく

育成センター	U12/U11		U14/U13		U16/U15	
	2018	2019-	2018	2019-	2018	2019-
都道府県	○	◎U12	○	◎U14	○	◎U16
ブロック	◎	◎U12	◎U13	×	◎U16/U17	×
ナショナル	×	×	◎U13/U14	◎U14 △U13	×U16代表	◎U15

◎：重点実施 ○：推奨 △：検討中 ×：実施せず

ブロック事業を休止することについて

1. 発掘機能を再検証した結果、ナショナルに繋がる選手はもっとシビアに選考しなければならない。都道府県育成センターにてナショナルに推薦できる選手基準にて厳格に判定し、ブロック育成センターを実施しなくとも選考する方法論とする。
2. ブロック育成センターの経費を都道府県育成センター（D-fundにて47都道府県に補助）、及びナショナル育成センターに充てる。
3. ブロック育成センター（旧ブロックエンデバー）が担っていた「伝達」の役割は直接都道府県育成センターにて行う。「ブロック間交流」の役割は各都道府県育成センターの延長として、都道府県裁量により別途機会を設けて補っていただくこともできる。
4. U12はナショナル育成センターに選抜するには身長が未発達の時期であり、代表候補確定が難しいことから、都道府県発掘にて有望選手をリストアップし、U13・U14都道府県育成へ情報を伝達することを目標とする。

都道府県育成センター

一気通貫

発掘・育成・指導者教育を都道府県の裁量にて活性化させていく。
JBAは指導内容・指導者教育・発掘方法論・育成方法論などに関する情報提供を積極的に行って支援する。
他県との交流（ブロック内交流戦実施等）を都道府県育成センターの一環（延長）として位置づける。

ナショナル育成センター

U13/U14/U15ナショナル育成センターはトップ選手の目標
U14以上での海外交流を検討
U16・U18・A代表への選出確率を高める（経験値を代表に活かす）

ブロック育成センター

U12のみ実施
指導者教育・都道府県における指導者教育活性化のために
選手の目標の場として

バスケットボール界が
偉大な組織に成長するために

都道府県の
果たすべき役割は大きい

■ ストックデールの逆説

- ・ 現実から決して目をそらすことなく、厳しい現実を現実として受け止める
- ・ 最後には必ず勝つとの確信を持ち続け、厳しい現実があっても、力を持つようになる目標を追求する

■ 大切にすべきハリネズミの概念(※ハリネズミ＝突き詰めた単純化)

＝育成世代コーチングフィロソフィ「将来を見据えた考え方」「プレイヤーズファースト」

- ・ 個を育成する 「選手作り」
- ・ 16歳までに個人基礎・プレー基礎を理解させる 「習熟度別指導内容」
- ・ 世界基準で教える 「細部へのこだわり」「強度」「ファンダメンタルの徹底」
- ・ チームスポーツとしてのチーム精神を理解させる
- ・ LTADの考え方
- ・ 人格形成を重要視する 「フェアプレー」「自立」「強調」「感謝」
- ・ 判断の習慣

■ 弾み車の回転

- ・ 準備段階から突破段階へ移行するパターン
- ・ 巨大で重い弾み車を回転させるのに似て、当初はわずかに前進させるだけでも並大抵ではない努力が必要だが、長期に渡り一貫性を持たせて一つの方向に押し続けていれば弾み車に勢いがつくように、やがて突破段階に入る

■ 良い組織が偉大な組織となるために

1. 全ては第五水準の指導者から始まる = 都道府県部会長の皆さんにお願いしたい
 考え抜かれた静かな過程によって弾み車を押し続け、誰の目にも明らかな「実績」を生み出すことに関心がある
2. 適切な人達をバスに乗せる = 誰を役職につけて、誰に手伝ってもらうか
 不適切な人達をバスから降ろし、適切な人達が適切な座席に座るようにする
3. ストックデールの逆説 = 必ずぶつかる困難にどう対応するか、どう考えるか
 正しい方向に押し続けていけば、いずれ突破段階に入る
 現実を直視すれば弾み車を回転させるために取るべき手段を理解できる
 最後には必ず勝てるという確信があれば、何ヶ月はおろか何年にもかかる準備段階を切り抜ける
4. ハリネズミの概念の3つの円 = 育成世代に大切なことは何か？
 深く理解するようになり、理解に基づく方向に弾み車を押し続けていけば、やがて勢いがついて突破段階に入り、促進剤によって勢いを加速できる。
 促進剤とは、関連する技術の応用。
5. 正しい決定を積み重ねていく規律 = 育成世代に大切なことを守りつつ、決定していく
 ハリネズミの概念に基づく正しい決定を行う
 規律ある行動が不可欠
 規律ある人材による規律ある考えが不可欠

(ビジョナリーカンパニー②飛躍の法則 p.292より)

2. ユース育成担当者の役割

1. 「バスケットボールで日本を元気にする」理念に基づく活動を行う

- ・都道府県を元気にする。
- ・プレーヤー，保護者，関係者の幸せ、笑顔を作る。
- ・バスケットボールで人格形成（人間力形成）に寄与する。

2. U11-U16都道府県育成センター事業

- ・目的：強化（発掘・育成）、指導者教育、普及、一気通貫
- ・将来を見据えた指導
- ・暴力・暴言・パワハラ根絶

3. U12ブロック育成センター事業

- ・目的：指導者教育、都道府県育成センターを経てプレーヤーの目標
- ・日程、会場の決定の管理
- ・県協会・ブロック協会への連絡
- ・運営スタッフの確保

4. リーグ戦事業との連携

- ・アンダーカテゴリー部会との連絡を図る

5. JBAからの伝達事項の周知

- ・育成に関する情報を都道府県内にて周知
- ・都道府県内周知方法論は都道府県の実情にてお願いしたい

6. 都道府県育成状況の返信

- ・育成状況調査等、作成して都道府県内で共有、JBAに返信する

② それぞれの役割

■ 都道府県カテゴリー別ユース育成コーチ

1. 都道府県育成センターでの技術指導の中心的役割
2. 都道府県内選手発掘の責任者
3. 都道府県における選手発掘の体制構築、JBA指導方針の推進
4. ブロック育成センター事業における指導補助

■ ブロックカテゴリー別ユース育成コーチ

1. ブロック育成センターでの技術指導の中心的役割
2. ブロック内選手発掘の責任者
3. ブロックにおける選手発掘の体制構築、JBA指導方針の推進
4. ナショナル育成センターにおける指導補助（生活指導を含む）
5. 代表選手選考に関する助言

□都道府県ユース育成マネージャー

1. 都道府県内ユース育成事業の総括
2. ブロックユース育成マネージャー、ブロックカテゴリー別ユース育成マネージャー、都道府県協会、都道府県アンダーカテゴリー部会との窓口

□都道府県カテゴリー別ユース育成マネージャー

1. 担当カテゴリーの都道府県育成センター事業運営
2. 都道府県ユース育成マネージャー、ブロックカテゴリー別ユース育成マネージャーとの窓口

□ブロックユース育成マネージャー

1. ブロック内ユース育成事業の統括
2. JBA、ブロックカテゴリー別ユース育成マネージャー、都道府県ユース育成コーチ・マネージャーとの連携
3. ブロック内都道府県育成センター事業の推進

□ブロックカテゴリー別ユース育成マネージャー

1. 担当カテゴリーのブロック育成センター事業運営
2. ブロックユース育成マネージャーとの連携

③ U16ユース育成担当者・アンダーカテゴリー代表強化との関係

1. U16はアンダーカテゴリー代表強化と関わる世代
2. U16ブロックユース育成コーチはアンダーカテゴリー強化部会にも出席し、「ユース育成コーチ連絡会」としてアンダーカテゴリー強化の役割を果たしている
3. 代表選手選考において「U16ブロックユース育成コーチ」に協力いただいている。
4. アンダーカテゴリー代表選手の発掘・選考情報についてはブロックユース育成コーチに窓口となってもらい、JBAアンダーカテゴリー代表強化担当との連絡を行ってきている。誤解が生じてはいけないため、連絡系統を絞って情報の拡散を制限している。
5. 決定後、ユース育成組織にも情報を展開することとしている。
6. U16となっているが育成センターとの関係性を保つための表記。
7. U16都道府県ユース育成コーチは都道府県内で高校世代（U18）の選手発掘についての情報を収集する役割を持って頂きたい。

3. 育成センターでの指導内容

■ 重点：技術委員会で取りまとめた日本バスケットボールの課題

1. シューティング
2. リバウンド
3. コンタクト・フィニッシュスキル

■ 習熟度別指導内容・育成センター指導内容

ゲームモデル	ドライブアタック	5アウト、4アウト
易→難	パス&カット	5アウト、4アウト
	オンボールスクリーン戦術	
	オフボールスクリーン戦術	

■ ゲームモデルの段階

1) 1対1重視: 突破を図ることを狙う段階 (ペイントアタックの意識、突破技術を磨く)

-ドライブ&キックが必要→スペーシングを指導

2) 1対1重視: パス&カットで人を動かし、ボールを動かすことで突破を図る段階

-ディフェンスが強くなるので、動いてズレを生み出す

-ボールをつなぐスポット、タイミングの指導

3) 1対1、2対2: パス&カットの中からオフボールスクリーンを利用する段階

-スクリーナーのセット技術の指導

-スクリーンを使うユーザーの技術の指導

-スクリーンを使う必要がなければスペーシングを取ることを考えた方がよい

4) 1対1、2対2、3対3: 相手のディフェンス力が高まり、自力で突破できない時に

オンボールスクリーンを使って突破を図る段階

-オンボールスクリーン・ボールマンの技術

-オンボールスクリーン・スクリーナーの技術

-オンボールスクリーン・ヘルプサイドのスペーシング及びプレー

4. 育成センターでのコーチング

将来を見据えた指導

指導者教育が全てにおいて重要

■ 育成コーチングの目的/考え方

- ・選手を作る
- ・選手を育てる
- ・可能性を信じてプレータイムを与える

■ マンツーマン推進

- ・将来成長する土台を作るためにマンツーマンを学ばせる
- ・勝利至上主義に指導者が引きづられない

■ リーグ戦

- ・普及的観点で試合環境を整える：補欠文化改善（複数チーム登録）
- ・拮抗したゲーム環境
- ・長期リーグ戦で日常にゲームがあること（練習～試合～練習）

■ 育成センター

- ・個の育成を目指す
- ・成長スピードを高める
- ・勝利を得るための戦術指導ではなく学ぶべき指導内容を習得させる
- ・指導者も習熟度別内容を学ぶ
- ・タレントスカウティングの考え方を実践：選手を見抜く力を養う

JBAインテグリティ委員会の設立

■人間力・法令遵守・危機管理

- ・強化指定選手だけでなくJBAファミリー全体への周知

暴力は犯罪・暴言は心への暴力

■暴力は子供に対してといえど罪になる意識、暴言は子供の心に傷を負わせることの自覚

- ・指導者が意識をすることが大切

JBAの対応策

■懲罰規定の整備・JBA基本規定、倫理規定の整備→都道府県協会での適用

- ・不適切な指導者に対するの処罰規定の整備。

JBAの予防策

■指導者養成部会の取り組み

- ・インテグリティ教育啓発
- ・指導者講習会・ディベロッパー講習会で実施

■部活動指導手引き

- ・フェアプレー精神

■育成コーチングの対象

- ・ コーチングフィロソフィ
- ・ 年代別トレーニング
- ・ 習熟度別指導内容
- ・ 練習方法論
- ・ 練習計画論
- ・ コーチングテクニック

- ・ タレントスカウティング
- ・ 人格形成
- ・ 保護者対応

育成世代で大切にすべきもの

動きの獲得、能力別・技術戦術トレーニング

易→難

認知判断、ドリル、強度と量

ピーキング、回復理論、PDCA, 1回・週・月

模範、映像活用、質問、オトクライン、コーチングスタイル

話し方、言葉、強度調節

選手を構成する要素の理解、早熟、PHV

フェアプレー、自立、協調、感謝

育成コーチングフィロソフィの理解、関わり方

■コーチングフィロソフィ

- ・ 何のためにコーチをするのか
 - 選手の成長を促すため○ 自らの欲を満足させるため×
- ・ 「将来を見据えた考え方」により、選手の成長の土台を構築する
- ・ 「個の育成」「選手づくり」をする年代
- ・ 「バスケットボールを通じて良き人材を育てる」
 - フェアプレー精神、全力を尽くす姿勢、自立、協調、感謝
- ・ 勝敗の考え方
 - 勝利を目指しながら育成する 競い合いは敬意と品格を持ってやるべきことをやりつつ勝利を目指す
 - 失敗から学ぶ 負けを受け止め次へ繋げる考え方
- ・ 「自立できる人材・選手」を作る
 - 自己判断をさせる、選手にも責任を持たせる、言われたこと以上をやる選手を作る

■練習方法論

- ・ 認知判断を求める
- ・ 指示する際の方法論を意識する
- ・ 考えずにできる練習を少なくする = 考えながら行う練習をする
- ・ 練習課題の難易度のコントロール

■練習計画論

- ・ 練習量と強度のコントロール
- ・ ピリオダイゼーション理論 = ピーキング（強度と量の調整）、回復理論を知る
- ・ PDCAの考え方（試合～練習～試合）
- ・ 1回の練習 = 待ち時間を短く、ボールをできる限り持って行う、使えるスペースを有効活用
- ・ 週の練習, 1ヶ月の練習 = 身につけさせるべき内容を整理しておく

■コーチングテクニック

- ・ 良き模範
- ・ 映像の活用 マネをさせる
- ・ フィードバックする 指導者が評価しながら質の高いものへ変えていく 求める基準との違い
- ・ 質問を使う
- ・ 教えすぎない
- ・ 話し方 言葉を選びながら
- ・ 自尊心を大切にす 価値ある人間だと思わせる できるという感情が大切 肯定的な指導

5. タレントスカウティング

課題

① よい人材をどのようにして発掘するかの視点

■早熟と晩熟の理解

早期専門化の弊害：将来成功しにくい、障害・バーンアウトの危険性
バスケットボールは晩熟型スポーツ

■タレント発掘の視点

運動能力

経験年数と技術レベル

最終予測身長（両親身長や環境要因による、データ収集による予測）

運動学習能力（コーディネーション能力）

メンタル特性（リーダーシップ、闘争心、積極性、ディフェンスへの意識）

② 現状のデータより

■2018年度U13/U14ナショナル育成センターより

- ・身長データよりPHVAを算出したところ、男女共に約1年の早期成熟が見られた。
=ナショナル育成センターに推薦されてくる選手は成長が早く、そのために選ばれている可能性がある。

→選手のパフォーマンスが早熟によるものか、高い運動能力を持っているものかを見極める必要がある

1. 都道府県育成センター選手選考方法論のモデル提示

- ・ 2019年度より都道府県育成センターの実施をお願いしている。
- ・ 選手選考を行うことが機能の一つであるが、その際の方法論について参考として頂きたく、モデル例として実施する。

2. 選手発掘の視点

- ・ 選手発掘の要素を知り、年代別（発達の程度が異なる）により視点を整理する

■ 選手選考を行う際にどのような視点を持つべきか？を考える機会

- ・これまで「身長の高い選手」を優先して発掘をお願いしてきた。
- ・「その世代で大きい選手を発掘すべきか？」
- ・特に男子代表において「サイズアップ」は重要課題である。
- ・代表に選出される年代（およそ20歳以降）において「高身長」であることが重要。
- ・選抜が始まっていく育成世代（12歳～16歳）において早熟の選手はその後身長の伸びが止まり、トップ世代での選出にそぐわないケースがこれまで見られた。
- ・強化的には「将来を予測しながら選手選考を行う」必要がある。
- ・身長が高いことは必要要素であるが、その他の要素は？
 - 身長＝「将来の最終身長」：体型、両親の身長、身長予測データ
 - 運動能力＝瞬発系：スプリント、ジャンプ力、チェストパス
 - 技術＝ボールハンドリング、シュート、状況判断力・・・
 - バスケットIQ＝戦術理解が必要（習っていない選手もいることに注意）
 - メンタル＝積極性、闘争心、向上心、リーダーシップ・・・

■ 実際の選手選考を行う際にどうするか？

1. 身長が高いことは大切な要素

- 努力しても変えられない要素であるため
- 将来最終身長が大きくなりそうな選手を見つける。
- その世代で身長高い選手は注目すべきであり把握することは重要。

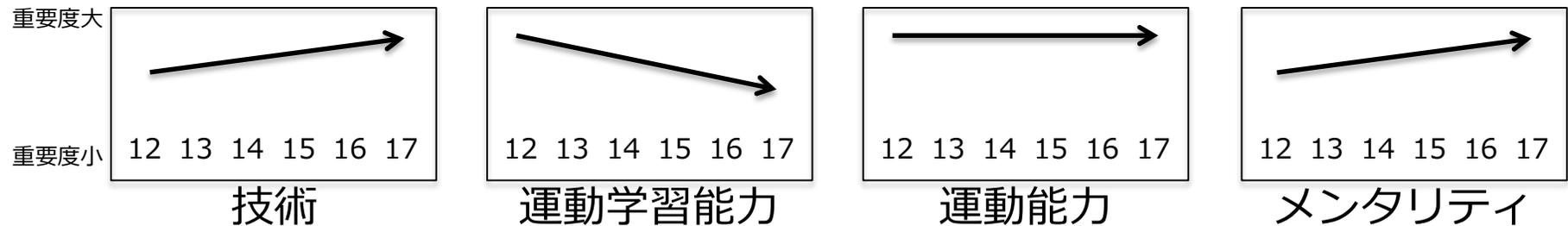
2. 小さい選手は必要ないか？

- PGは小さくても突出した能力があればやっていけるポジションである。しかし突出した能力が必要であることを十分考慮する必要がある。
- SG以降はできる限りサイズのある選手で代表は構成することが求められている。

2. 技術・運動能力・運動学習能力・メンタリティ

- 運動能力は重要要素：トレーニングでは獲得しにくい瞬発系，神経系。スプリント（加速）、ジャンプ力、アジリティ、クイックネス。
- 運動能力があれば技術が不足しても選考すべき（ただし若い時期、年を経るに従い技術レベルが必要となる）。
- 技術はトレーニングにより向上させることができやすい（運動学習能力との関係大）。
- 運動学習能力（コーディネーション）の高い選手は経験年数が短くても今後成長する可能性を多く持つ。若い世代で特に重要視する。若い世代で特に獲得すべき能力。
- メンタリティは重要な要素だが成長に伴い変化する可能性も考慮する。若い世代で重要視し過ぎない方がよい。

■年代により選考における重要度は変化する：完成年代への残り年数から考えて



■ 平均ではなく特別なものを持っていないか？（シュート、スピード、運動能力・・・）

■ その選手の短所がどの程度の問題か、解決可能か？

→ 技術は解決可能か？

→ 運動学習能力は解決可能か？

→ 運動能力は解決可能か？

→ メンタリティは解決可能か？

★ 選考するべきと考えられる例（最終予測身長が高いと仮定し）

- ・ シュートが下手だが運動能力がある・・・練習によりシュートは上手になる要素
- ・ シュートが特別に上手いが、ディフェンスができない・・・成長に従いディフェンスができるようになる可能性有り

最終予測身長、運動能力、技術（運動学習能力、経験年数との関係有り）、メンタリティを成長段階を鑑みながら考える。

※ PGは特別な才能でサイズを凌駕できる場合がある。

■問題点

1. 早熟系の発掘が多く行われている傾向

ナショナル育成センターに発掘されている選手のPHVA（年間最大身長発育量）を調査したところ、男子11.9歳、女子10.4歳であった。日本人の平均PHVAは男子で13歳、女子では11歳であり、男女共に平均して1年弱の早期成熟の傾向が見られた。
この結果からは、ナショナル育成センターに推薦され選出されている選手は、成長が早いために選出されている可能性があることを示唆している。

2. 晩熟でまだパフォーマンスが低い選手は落とされている

PHVAが来ていないため身長が大きくない選手で、運動能力がある選手は、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。
技術の高い選手も同様に、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。

早熟と晩熟、最終予測身長を見極めることが重要

■ U13ブロックDCでの選手発掘

- ① 今は小さくとも将来高身長になる可能性の高い者
- ② 運動能力の高い者
- ③ 技術の高い者

■ 理由

- ・ 強化的視点では将来を見据えた選手選考が必要と考えるため、高身長者になりうる選手を優先して発掘することが重要。
- ・ 運動能力の瞬発系は先天的要因が大きい（スプリント力、ジャンプ力に優れる者）。
- ・ 技術は後天的にトレーニングにより向上が考えられる要素であるため。（よってこの年代では優先順位が低い）

■ 男女別の視点

<男子>

- ・ PHVAが始まっていないことが多いため、パフォーマンスの見極めに注意が必要。

<女子>

- ・ PHVAが男子より早いため、身長について男子より見極めがしやすいが、晩熟の選手もいる可能性を考慮する。

■ U18ブロックDCでの選手発掘

- ① 身長の高い者（将来身長が高くなる可能性のある者を含む）
- ② 運動能力の高い者
- ③ 技術の高い者

■ 理由

- ・ 国際的には代表で活躍する選手が出始める年代であり、代表選出確率が高くなければならない年代、強化的視点ではシビアな見極めが必要。
- ・ 運動能力に劣る（遅い、跳べない）者は技術が高くてもトップレベルでは厳しい。
- ・ 身長高く、運動能力の高い選手は技術が多少低くても可能性はある（13歳よりは可能性は狭まる）

<性差の視点の違い>

- ・ 女子はフェーズ4（身長の伸びが止まっている）に到達している選手の割合も増えるが、男子ではフェーズ3（終わりがけ）の選手が多い。
- ・ いずれも成長による変化は13歳頃よりは少なくなってきたため、小さくて今後身長が伸びそうな選手を期待することは少ない。

1. 形態測定
2. フィジカルテスト
3. コーディネーションテスト ★時間とリングがあれば実施
4. スキルチェック
 - 1) シューティング
 - 2) 1対1 オフェンス・ディフェンス
 - 3) リバウンディング コンタクト・ボールへの執着心など
5. プレー指導
 - 1) U13:ドライブ&キック (2対2, 3対3)
→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシング
U18 : オンボールスクリーンプレー (4対4, 指導時間があれば5対5)
→オンボールスクリーンとオフボールマンのタイミング、スペーシング
 - 2) トランジション・アウトナンバー
→2対1~2対2
→3対2~3対3
6. スクリメージ
 - 1) U13は3対3または4対4
 - 2) U18は4対4または5対5

1. コーディネーションテスト 数値化できないものは以下の3段階評価にて実施
プラス：うまくでき、確実である
ゼロ：およそうまくできているが、確実ではない
マイナス：うまくできない
2. シューティング
1分間、コーナー、45度、トップ、45度、コーナーの5カ所から3ポイントを5本ずつ
時間があれば打ち続けて良い。打った本数と入った本数の記録。
3. 1対1 オフェンス・ディフェンス
ドリブルスキル、スコアリング、ディフェンス力、集中力などがチェックできる
4. リバウンディング
コンタクトをいとわないか・ボールへの執着心・積極性などがチェックできる

5. U13:ドライブ&キック (2対2, 3対3)

プレー指導の後、スクリメージにて反応を見る

→ボールマンのプレー:適切なスペーシング、タイミングでアタックができているか、自分本意のプレーだけになっていないか、無理なショットセレクションを続けていないか

→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシングを考えながらプレーしているか

6. U18: オンボールスクリーンプレー

プレー指導の後、スクリメージにて反応を見る

→オンボールスクリーン:ボールマン・スクリナーのアタックにおいて適切な状況判断ができているか

→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシングを考えながらプレーしているか

7. トランジション・アウトナンバー: 2対1~2対2, 3対2~3対3ともに

スピードドリブル, ドリブルからのパスなどスピードある中でのボールハンドリング能力

動きながらのボールコントロール、ボディコントロール、状況判断ができるか

6. スクリメージ

スコアリング能力、リバウンディング、アシスト、リーダーシップ、オフボールムーブ

ディフェンス力 (オンボール、オフボール:ポジション、ビジョン、予測:危険を察知する力)

その他ゲームに貢献する力

6. 2019年度からの発掘

(ナショナル育成センター・アンダーカテゴリー代表との連携)

1. 2019年度からの選手発掘方法論

- ・ U13/U18ブロックDCは実施しないため、選手発掘方法論が変更となる
- ・ 都道府県におけるナショナルに推薦できる選手の発掘をシビアに実施する必要がある
- ・ ブロックにおける発掘責任者と合議による会議体によりナショナルトライアウト・代表候補合宿への選手推薦を実施する

2. 会議体準備

【U15世代】

- U15ナショナル育成キャンプトライアウトへの推薦者協議
ジュニアオールスター（U15選手権）・全中時にブロックユース育成コーチにて協議し
トライアウト受験者を決定
- U14/U13ナショナル育成キャンプトライアウトへの推薦者協議
ブロックで都道府県ユース育成コーチにより協議
ブロックユース育成コーチにて協議しトライアウト受験者を決定

【U18世代】

- インターハイ・ウインターカップ時に協議
- 男子は9～10月、女子は2月にエントリーキャンプ参加者を決定
ブロックで都道府県ユース育成コーチにて協議

① 2019年度からの発掘方法

月	U12	U13	U14	U15	月	U16	U17	U18
2019/1		ブロックDC 都道府県4名 (ブロック総数による) 計188名			2019/1	ブロックDC 都道府県4名(ブロック総数による) 計188名		
2					2	エントリー合宿選手選考 U18代表エントリー合宿(女子)		
3		↓ 育成センター伝達講習会			3	育成センター伝達講習会		
4		ジュニアオールスターU13/U14選手予備選考			4	男子U18代表合宿		
5					5			
6					6			
7					7	男子U16アジア(予定)		
8		U13トライアウト 選手予備選考	U14トライアウト 選手予備選考	U15トライアウト 選手選考	8		日韓中	
9				トライアウト60名	9			
10				NDC①30名 NDC②20名 NDC③15名	10	U16国体 女子U16アジア(予定)		
11	U12ブロックDC(9カ所) 都道府県4名 計188名				11	U18代表合宿(男子) 育成センター伝達講習会(予定)		
12	育成センター伝達講習会	ブロック別コーチ会議 U13/U14選手選考			12			
2020/1		トライアウト60名	トライアウト60名		2020/1			
2		NDC①30名	NDC①30名 NDC②20名 NDC③15名 育成センター伝達講習会(予定)		2	エントリー合宿選手選考(女子) U18代表エントリー合宿(女子) 育成センター伝達講習会(予定)		
3				U15プレ選手権	3			
4					4			
5					5			
6					6			
7					7		U18アジア(予定)	
8		U13トライアウト 選手予備選考	U14トライアウト 選手予備選考	U15トライアウト 選手選考	8		日韓中	
9				U16代表エントリー合宿	9			
10	U12ブロックDC(9カ所) 都道府県4名 計188名				10	U16国体		
11	育成センター伝達講習会	ブロック別コーチ会議 U13/U14選手選考			11	U18代表合宿(男子) 育成センター伝達講習会(予定)		
12				U15選手権	12			
2021/1		U13トライアウト 選手選考	U14トライアウト 選手選考		2021/1			
2		トライアウト60名	トライアウト60名		2	エントリー合宿選手選考(女子)		
3		NDC①30名	NDC①30名 NDC②20名 NDC③15名 育成センター伝達講習会(予定)		3	U18代表エントリー合宿(女子) 育成センター伝達講習会(予定)		

ブロック別ユース育成コーチ会議 U13/U14選手選考 年1回(11~12月)
ブロックユース育成コーチ会議 トライアウト受験者 年2回(8月、12月)

② 育成センターの機能・発掘の流れ

育成センター機能

発掘

- ・早熟と晩熟、技術と経験年数、将来予測身長、運動能力、運動学習能力を考慮。
- ・都道府県からナショナルトライアウトに推薦できる選手を見つける（責任者は都道府県ユースコーチ及びユースダイレクター）。
- ・県からの推薦を受けてユースダイレクター（仮称）によるチェックがあり、最終選考会議へ推薦。
- ・ナショナルトライアウトは原則60名以内で実施する。

育成

- ・「選手を作る」
- ・LTAD育成方針に沿い、4つのフェーズのどこに位置するか考慮
- ・各年代毎の特徴を考慮
- ・強化モデル、一貫指導を考慮
- ・育成センター指導内容を参考に
- ・育成コーチングの実践
- ・習熟度別指導を実践

指導者教育

- ・LTADの理解を深める。
- ・バスケットボール構造、練習計画をより深く学ぶ。
- ・指導実践を通じて育成コーチング(HOW)、習熟度別指導内容(WHAT)を検討する機会
- ・関わる指導者全体で何が最善かを検討する機会
- ・育成年代のフィロソフィ、トレーニング、コーチングスキル、保護者対応などを学ぶ。

普及

- ・できる限り県・地区・市町村レベルに浸透させる。
- ・選考されることでのステイタス。
- ・保護者教育

U13/U14/U15における選手発掘の流れ（2019以降）

県からの推薦

*1
ユースダイレクター
チェック

最終
選考会議

トライアウト
実施

60名以内

NDC

30名以内

NDCにはこの道の他、強化コーチの推薦による道もある。

*1 ユースダイレクターは新規設置を検討中。
役割は都道府県にとどまらず指定されたエリアの選手の発掘、指導内容の伝達、組織整備のチェック等。発掘において選手選考方針の下、都道府県・ブロック格差を調整する。
2018年度はブロックユース育成コーチがブロック内選考責任者。

③-1 育成センター事業 → 代表活動 (2018 : FIBA U18Asia U17World)

	2018												2019																		
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6																
U12	育成センター伝達講習会															PDC 任意	B D C	B D C	B D C	B D C				B D C	B D C						
U13																				トライアウト	N D C				B D C	(2021 U16代表)					
U14																PDC 任意				トライアウト	N D C ①	N D C ②	N D C ③	(2022 U18代表)			ジュニア オールスタ ー				
U15																				選考会議	2019 U16代表合宿 →										
U16																PDC 任意										B D C	2020 U18代表選考				
U17				世界女子 FIBA							B D C	2020 U18代表選考																			
U18				アジア男 FIBA	日韓中			アジア女 FIBA	2019 U19代表合宿 →																						

③-2 育成センター事業 → 代表活動 (2019 : FIBA U16Asia U19World)

	2019												2020					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6			
U12	PDC 必須												B D C					
U13	PDC 任意												(2024 U18代表) トライアウト NDC					
U14	PDC 必須												(2021 U16代表) トライアウト NDC① NDC② NDC③ NTC以外の拠点を探る					
U15	PDC 任意												トライアウト NDC① NDC② NDC③ (2022 U18代表) プレ大会 U15					
U16	PDC 必須												2019 U16代表合宿 → FIBAアジア 国体 2020 U17代表合宿 →					
U17	2020 U18代表合宿 →												日韓中 →					
U18																		

育成センター伝達講習会

③-3 育成センター事業 → 代表活動 (2020 : FIBA U18Asia U17World)

	2020						2021							
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
U12	PDC 必須						B D C							
U13	PDC 任意						(2023 U16代表) トライアウト NDC							
U14	PDC 必須						(2024 U18代表) トライアウト NDC① NDC② NDC③ NTC以外の拠点を探る							
U15	PDC 任意						選考会議 2021 U16代表合宿 U15 本大会 →							
U16	PDC 必須						国体 (2022 U18代表選考)							
U17	2020 U17代表合宿 →						世界 FIBA A							
U18	2020 U18代表合宿 →						アジア FIBA A 日韓中							

育成センター伝達講習会

7. 連絡事項

1. 2019年3月10日（日）育成センター伝達講習会@NTC 12:00-17:00

- ・育成センターにおけるタレント発掘の視点、タレント育成、指導内容の考え方、クイックネスおよびジャンプトレーニングの実際例の紹介（予定）
- ・ドイツからDr. Antje Hoffmann 氏を招聘、トースティンロイブル氏と共に講習を行う（ドイツ協会との提携による）
- ・都道府県における育成責任者、発掘を担当する方、講習の後都道府県内にて講習内容を伝達できる方にお越し頂きたい。（都道府県ユース育成担当者には連絡済み）

2. マネージャー会議（U13/U18ブロックDCにて実施）

- ・暴力・暴言・パワハラの根絶
- ・タレントスカウティング
- ・育成コーチングフィロソフィ「将来を見据えた指導」
- ・指導内容「ゲームモデルの段階」
- ・技術委員会でまとめられた技術的課題の伝達